



Title	總括討論のありかたについての一提言
Author(s)	尾崎, 萃
Description	講演要旨 Contributed Papers
Citation	觸媒, 12, 106-106
Issue Date	1955-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22485
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_P106.pdf



総括討論のありかたについての一提言

尾 崎 萃

(東京工業大學)

従来の討論会においては個々の研究内容についての討論に終始し、研究の意義、他分野との関連などについては討論されることが少なかった。今回は序論が加えられたのでこの点が多少進歩していると思うが、尚最後の総括討論として、研究テーマ、得られた結論の意義などについて討論してはどうかと考えた。

現在触媒および触媒反応の研究は、二つの方向に大別されると思う。その一つは触媒研究所において主としてとられているもので、演繹的な方法である。即ち水素電極反応の理論から、水素添加反応の中間体が推定され、更に重合異性化の機構となり、青酸合成反応に到る発展は理論の拡張、発展の結果として応用面迄及んだものである。

他の一つの方法は数多くの研究者によつてとられているもので、帰納的な方法である。即ち、多数の実験結果を整理して、その中から法則性を見出しその法則相互の間に更に法則を見出して行くことによつて、新しい触媒を見出して行く方法である。一般にはこの方法が多くとられる結果として、従来多くの成果はこの帰納によつて得られたものである。しかし帰納は何を帰納するかによつて重大な混乱をひき起すことがある。物質的な裏付けのない、抽象的な概念によつて事実を云いかえたに過ぎない場合、特に混乱をひき起す。

これを避けるには、演繹の方向と、帰納の方向とがよく、焦点があつて、うまく連絡する必要がある。

そこで総括討論としては、研究テーマ相互間の問題、演繹の方向と帰納の方向とがうまくみ合っているか、どうか、かみ合わせる努力がなされているかどうか、についての討論が欲しい。